様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１２８２１

研究課題名（和文）祈りによる徳の涵養に関する研究―東方教父オリゲネスと福祉共同体ベーテルを例に

研究課題名（英文）A Study on the Cultivation of Virtue through Prayer: The Case of the Eastern Father Origenes and the Welfare Community Bethel

研究代表者
梶原　直美（Kajihara, Naomi）

関西学院大学・教育学部・教授

研究者番号：９０３１０６８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：東方教父オリゲネスの著作から、オリゲネスにおける徳理解について探究し、さらに彼の門下生タウマトゥルゴスの証言から、オリゲネスの生涯にみる徳実践のありかたについて検討した。そのさい、オリゲネスの信仰と祈りが彼にどのような影響を及ぼすのかについても考察した。
それらは、「オリゲネスの信仰にみる徳実践の可能性」（『宗教と倫理』21号、15－29頁）および「オリゲネスとことば―神の像とそこに向かう生を求めて―」（『ことばの力―キリスト教史・神学・スピリチュアリティ』キリスト教新聞社、2023年3月）に発表した。
当初は福祉共同体ベーテルを訪問予定であったが、新型コロナ感染症拡大により中止した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
科学技術が発展し、様々な恩恵を受けるなかで、それを使用する側の倫理が問われて久しい。倫理の問題は古来より問い続けてこられたが、20世紀からは「徳倫理」に関する研究が増加し、結果だけを問うのではなく行為者自身の内発的な要素に着眼することの重要性が認識されるようになっている。
本研究では、有徳とみなされるオリゲネスについて、生き方、思想を論じ、信仰との関連性について述べた。これは、現在に生きるわれわれにとっても、真の意味で豊かに生きる指針への示唆を与えるものであると言える。

研究成果の概要（英文）：This study explored the Eastern Fathers Origenes' understanding of virtue in his writings, and examined his life and practice of virtue through the testimony of his student, Thaumaturgos. In doing so, I also examined the influence of Origenes' faith and prayer on him.The results are presented in "The Possibility of Practicing Virtue in Origen's Faith", Religion and Ethics, Vol. 21, 2021, pp. 15-29, and "Origenes and the Word: In Search of the Image of God and the Life Toward It", in: The Power of the Word: Christian History, Theology, and Spirituarity, 2023.
In the beginning it was scheduled to visit the welfare community Bethel in Germany, but cancelled due to the spread of the new corona infection.

研究分野：宗教学

キーワード：徳　愛　信仰　キリスト教

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

AIや医療技術をはじめ飛躍的に科学が進歩する現代において、その技術をいかに用いるかに留まらず、われわれ人間がいかに生きるべきなのかという根本的な問いに応えることは容易ではなく、それはその規範を見出すことの困難さを意味している。人の生き方を問う倫理学は、20世紀に、有益な結果や行為に焦点を当てていた「功利主義」や「義務論」に加えて、行為者である人間のあり方を問う「徳倫理学」を再び展開させるに至った。

申請者は、人の生き方と、それを支える宗教性に関心を持ち、研究を展開してきた。そのなかで申請者が継続的におこなってきたのは古代キリスト教思想家オリゲネスの祈禱論の研究である。2015年9月に提出した博士学位論文「オリゲネスの祈祷観に関する研究―『祈りについて』を中心に―」では、オリゲネスの世界観、そこにささげられた祈り、それに支えられた生のあり方について論じた。オリゲネスの祈りは単に個人的な利益を乞い求めるものではなく、それらを超えたところのものを希求する。それは、愛や自発的な徳の実践に結びついていた。これにより、申請者は、祈りが人間の徳の涵養に寄与するのか否か、寄与するのであれば、どのような祈りによって、いかにして徳性を身に着けるのか、ということへの問いを強く持つこととなった。

とくに、オリゲネスは高邁な生涯を送ったことで知られるため、近年は彼の徳概念について、彼の徳実践に関する記録と彼自身のテキストから、徳理解に関する考察を行ってきた。その結果、徳の実践に喜びが伴い、神への信仰がそれを支えていたことを明らかにした。(「生の実践としての『徳』（αρετη）―オリゲネスにみる理解から」、2018年）また、この研究に先立って、オリゲネスの生きるプロセスには祈りの実践が不可欠であり、その生き方は彼の捧げる祈りと密接に関わっていたことを明らかにした。(『オリゲネスの祈禱論：＜祈りについて＞を中心に』、2017年)

申請者は、これらをとおして、行為の主体である人間に着目し、祈りから生じた徳が他者にも自己にも喜びを生じさせる行為を導くものであったことを、オリゲネスの例から提示した。

２．研究の目的

研究の目的は、祈りあるいは祈る行為が人間の生き方といかに関わり、人間の精神にいかなる影響を及ぼすのかを明らかにすることであった。これにより、他者と形成する多様な社会のなかで、行為選択の適切さのみならず、個々人の徳性の涵養と、それに伴う喜びといった肯定的反応を享受することへの、ひとつの手掛かりを見出し得ると考えたからである。

３．研究の方法

まず、生のありかたをめぐって、オリゲネスに関する文献研究をおこなった。著作のテキストをもとに、幾つかの語に着目し、研究を進めた。その中心に据えたのは「徳」であり、オリゲネスにとって徳は、魂の成長にふさわしい行為として理解されていたが、徳実践自体が目的的に理解されていないのかという問を立て、オリゲネスの信仰者としての側面に注目し、神に対する彼の信仰と徳実践との関わりについて論じた。

なお、その後、ドイツのベーテルで現地調査をおこなう予定であったが、新型コロナ感染症拡大とその後の状況の影響により、渡航ができなかった。そのため、これに替えて、国内のディアコニー施設を訪問するとともに、文献による研究をおこなった。

４．研究成果

まず、オリゲネスにとって徳は、魂の成長にふさわしい行為として理解されていたが、徳実践自体が目的的に理解されていないのかという問のもとに、本研究は、オリゲネスの信仰者としての側面に注目し、神に対する彼の信仰と徳実践との関わりについて論じた。その結果。オリゲネスの徳の実践は、信仰の対象であるキリストの姿に強く結びつき、愛のうちを歩んだキリストへの愛とともにその模倣を志向する実践であり、それは自らが贖われた体験のなかから生じるものであったことを明らかにした。この結果は、2021年12月発行の『宗教と倫理』(宗教倫理学会) 21号（15-29頁）に、「オリゲネスの信仰にみる徳実践の可能性」（査読あり）を発表した。

また、2021年11月には、関西学院キリスト教と文化研究センター（RCC）主催の「ことばの力プロジェクト」研究会で、「オリゲネスとことば―聖書に示される神の像とそこに向かう生を求

めて―」を口頭発表した。この研究では、キリスト教における「ことば」の研究として、聖書のことばを真理とし、生の指針とするオリゲネスの思想について考察して、以下のことを提示した。すなわち、聖書のことばを解釈するオリゲネスの著作には、人間に内在する「神の像」と、それに基づく生の歩みに関する言及が見られる。そこには「善」としての神理解がみられ、キリストの生涯に見出される。オリゲネスは、「徳」の実践によりこのキリストを模倣しようと努め、それはオリゲネス自身の生き方に反映されているとともに、門弟たちに強い影響を与えている。

この研究をもとに、2023年3月発行の研究成果物である『ことばの力―キリスト教史・神学・スピリチュアリティ』において「オリゲネスとことば―神の像とそこに向かう生を求めて―」を発表した。本著作は、上記の研究会における発表をもとに、７人の研究者それぞれの研究が発表されたものであり、このなかで申請者は、六言語の対観聖書を編纂し、聖書のことばを追い求めたオリゲネスが、そのことばといかに向き合い、それを自身の歩みに体現したかを、オリゲネスの世界観および弟子のタウマトゥルゴスの証言も交えながら論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 梶原直美	４．巻 21
２．論文標題 オリゲネスの信仰にみる徳実践の可能性	５．発行年 2021年
３．雑誌名 宗教と倫理	６．最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 赤江達也、梶原直美、赤江雄一、加納和寛、橋本祐樹、打樋啓史、T.O.ベネディクト	４．発行年 2023年
２．出版社 キリスト新聞社	５．総ページ数 166
３．書名 ことばの力 キリスト教史・神学・スピリチュアリティ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関